

2.【大会印象記】

山内 太（長野経済短期大学）

私は今回会員として初めて大会に参加させていただきました。実は前回大会にも、まだ会員ではなかったのですが、参加させていただきました。しかし今回は、会員として、また初めて報告者として参加させていただきましたので、格別の感動を賜りました。この拙文では、それに関する私の心の動きを書こうと思います。

そもそも村研には、安孫子麟先生をはじめ、長い間お世話になっている諸先生方がたくさん入会されていたため、大学院の頃から親しみを感じていた学会でありました。しかしその一方で、学会報告の場では、常に激しい討論のやりとりがあるという、ちょっと怖いイメージも併せ持つ学会でもありました。前回大会、もしかしたら次回大会で報告するかもしれないと感じ、参加させていただいたのですが、想像通り、活発な意見交換・議論のやりとりがなされ、非常に楽しい経験をさせていただきました。また泊りがけであったので、初めてお話をさせていただいた諸先生方から、興味深いお話を伺うことができ、有意義な参加となりました。

そして遂に今大会において、東北大学の長谷部弘先生を中心とする共同報告の一つとして、村研学会において報告をさせていただくことになりました。この報告は、色々な意味で緊張を強いられるものでした。というのも、私の研究テーマは大学院以来、一貫して近代日本経済史であったのですが、共同報告の一つとして、今回私に与えられたテーマが、近世土地問題に関する研究というものであったためです。近世史についてはほとんど首を突っ込んだことのなかった私が、ある意味で全く未知の世界に飛び込もうとしていたのですから、大きな緊張と不安を感じました。

それとやはり、村研大会で報告するという、そのことにも非常な緊張、プレッシャーを感じていました。先にも述べましたが、この学会に対する私の印象は、たとえ報告者が大先生であっても、容赦なく質疑・意見が飛び交い、激しいディベートが展開されている、というものがありました。しかも様々な研究分野の先生達が集まり、それぞれの専門分野の深い学識に根ざした鋭い質疑が為されている、非常に学際的な学会大会であると感じていました。それ故私は、報告前、他学会で報告する場合以上に、いい加減な報告はできない、あるいは、いい加減な報告をしてしまったらどうしよう、という様々な雑念が、私を取り巻いていました。

大会当日には、都心の、しかも非常にモダンな東洋大学のキャンパスで大会が行われ、村研のイメージとは少し違うなあ、と感じました。また報告会場が二つ設定され、それまでのようないつの会場で、大勢の参会者が一つの報告を聞き、議論するというスタイルでもなく、正直少し戸惑いもありました。しかし報告がはじまり、会場内の諸先生方から報告者へ鋭い質疑が連発されるようになると、「ああやはりここは村研大会なんだ。えらいところに来てしまったなあ」と感じてしまいました。

私の報告はというと、まあそれはここでは書かないことにしておきます。ただ、様々な諸先生方から、貴重なコメントをたくさん頂くことができ、報告後、今後の研究の方向性について、様々なビジョン、イメージがより明確に浮き上がり、私にとっては非常に有意義な報告となった、ということだけは記させていただきます。また報告終了後の懇親会においても、社会学等他の研究分野の人々ともお話しさせていただく機会を得、大変貴重な経験をさせていただきました。もし今大会が例年通り泊まりがけであったならば、もっと興味深い御話を、諸先生方から窺えたかもしれないと考えると、少し残念な気もしました。

以上今回の村研大会に参加するにあたっての私の気持ち・考えを、只つらつらだらだら書いてしまいました。ここまで読んで退屈してしまった皆様、どうもすいません。結局うまく書くことはできませんでしたが、村研大会に参加して、改めて自分の不勉強を再認識すると共に、学際的な研究・交流のおもしろさを再発見し、村研の魅力に惹き付けられるものを感じました。そして村研の様々な研究分野の方々と一緒にになって、共同調査・共同研究が出来ればいいなあと、漠然とした淡い希望を抱いたのでした。

最後に私の拙い報告を聞いて下さった方々、またコメントを下さいました方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。